

協会設立記念号  
2006年11月号

「会長挨拶」



宮野 博隆 会長

パーフェクト クラニオロジー協会は2006年10月1日、東京 新宿のワシントンホテルのコンベンションホールに於いて、登録会員111名を持って、設立実行委員 小黒秀剛先生の協会設立宣言によって発足しました。

協会発足にあたり、メイジャー B・デイジョネット先生、PAAC、SORSI、今迄応援して下さい多くの先生方、そして協会設立実行委員の先生方に深く感謝の意を表したいと思います。

パーフェクト クラニオロジー 協会の設立目的は全ての医療にとって共通の医療哲学とテクニックを併せ持つCSFプラクティスを、日本はもとより全世界に普及させることにあります。

この100年、西洋医学は目覚ましい進歩を遂げ、カイロプラクティック、オステオパシーも普及し、東洋医学は長い歴史を誇っております。そしてこれらの医学はそれぞれ別個の医療概念を持っています。しかし、現在に至って進歩は頭打ちになって来ており、今こそ全ての医学に通用するCSFプラクティスの医療哲学を更に発展させなくては行けないと考えます。

患者は様々な症状で苦しんでおります。その症状には全て原因があります。単に症状を軽減させるだけではなく原因を根本から取り除く治療が必要です。症状は治療によってリアルタイムで変化します。そしてその症状を作り出す原因は一つではなく多くの原因が複合的に作用しております。

ボディランゲージ（診断）においても、治療においてもカギとなるのが脳脊髄液（CSF）です。CSFプラ

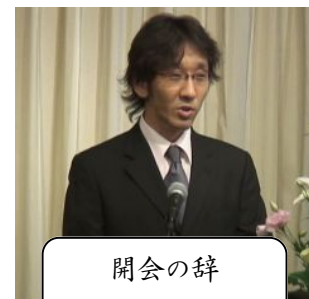
クティスとは脳脊髄液と技術の合成語であり、脳脊髄液の増産と循環をコントロールして体を健康に導く、理論とテクニックです。

CSFプラクティスには従来の医療にはなかった三つの特徴があります。

1. 一般の治療が刺激による防禦反応を利用するのに対して、CSFプラクティスは防禦するのではなく協調的な刺激により体が改善しようとする反応を引き出す。
2. 一般の治療はCSFの消極的増産に止まるが、CSFプラクティスは積極的に増産し生命力、免疫力をアップさせることができる。
3. 一般の医療は機能的改善のみを行なうのに対し、CSFプラクティスは組織の再構成いわゆる組織の若返りを実現した。

これらの理論と技術は世界初、史上初の快挙であると考えます。

「パーフェクト クラニオロジー」とは「完全なる頭蓋骨学」という意味ですが、CSFプラクティスによって体を機能的にも組織的にも改善させることができます。機能の改善が完全に近づくほど、体の構造的バランスも完全に近づき、頭蓋骨の検査ポイントをモニターすることにより、更なる機能の改善、そして完全にバランスされた頭蓋骨へと近づいていくのです。我々はパーフェクト クラニオロジー 協会を通じて、完全な頭蓋骨、より健康な状態を求めて研究し、日本そして全世界へと普及発展させて行きます。今後、皆様の益々のご協力をお願い致します。



開会の辞  
市橋 悟 先生



協会設立宣言  
小黒 秀剛 先生



講演中の宮野会長

「記念講演を聴講して」

光弘 敏 先生

平成18年10月1日、東京・新宿ワシントンホテルにおいて、パーフェクト クラニオロジー協会が正式に発足した。当日、同ホテルで行われた設立記念講演および祝賀会には、総会員数111名（10月1日現在）のうち、63人の会員や来賓が出席し、将来の医療の基盤となるであろう同協会の、新しい門出を祝った。

当日は降ったりやんだりのあいにくの空模様となったが、講演会場には1時間以上も前から運営委員の面々が集合した。いずれも普段は治療することしか知らない人物ばかりであるから、講演会の開催などには誰一人として慣れてはいない。緊張と笑顔が7：3くらいの空気の中、運営委員長・市橋 悟の指示が飛び、各委員は受付や誘導の手筈を整えた。

関係各方面から贈られた花束が見守る中、やがて会場時間となり、セミナーで互に見知った顔ぶれが見慣れぬ正装姿でちらほら現れ始めた。参加者は、北は北海道、南は鹿児島と全国から集まったため、新宿駅あたりで迷ったのか、全員が揃ったのは講演会開始数分前であった。しかし始まってみれば会場は満杯で、どの顔にも、新しいことに自分も参画するのだという期待感が漲っていた。

定刻よりわずかに遅れ、いよいよ開会である。緊張感丸出しの森 光夫の、その緊張とは裏腹の実に流暢な司会で会は幕を開けた。

市橋 悟の開会の辞、小黒 秀剛の協会設立宣言、運営委員12名の紹介、そして来賓祝辞・・・とプログラムは進行した。

元鹿児島大学大学院助教授の横山幸三氏は、その祝辞の中で、ソフトブロックによる脳呼吸法の公開実験に触れ、「CSFプラクティスの脳組織への好影響は、現存する他のどんな治療法よりも優れている」と述べた。

また整形外科院長の加藤 久佳氏も、自らのクリニックの患者約50名にCSFプラクティスのテクニックで治療し、好結果を出した件を報告した。

さて、目玉の宮野博隆会長による記念講演は、「統合医療・代替医療とCSFプラクティス」をテーマに、約80分に渡って行われた。

時間の制約が大きい上、セミナーの常連に向けてではなく、対外的な発表という点が意識されたためか、「六口な」宮野会長の弁舌にも若干の固さが見受けられた。が、その内容は、今後の医療界には必ずや革命的な影響を及ぼすであろうことが予想されるものであった。中でも、「健康とは何か、治療とは何をするのかを論理的に突き詰めてゆくと、CSFプラクティスの技法こそが統合医療の根幹とされるべきであり、手術や投薬の方が代替医療であるといえるのではないか」とする逆転的発想は、単なる自画自賛でなく、実績と理論に裏打ちされた、宮野会長らしい論の展開で、今回の講演の白眉であった。

そんな熱のこもった会長の公演中、運営委員の笠畑 秀文は、後に続く祝賀会で乾杯の音頭を任されていたため、その挨拶の文句を暗記するのに懸命となり、やがて緊張に疲れて居眠りしてしまった・・・という涙ぐましくも、ほほえましい裏話があったことも、ここに付記しておく。（文中敬称略）



講演会を真剣に聴講する先生方